メイヤロフのケアリング論の構造と本質

西　田　絵　美

〔抄　録〕

〈ケアリング〉は、看護の中核的概念として位置づけられているが、その概念は十分に吟味・検討されたものではなく本質的特性は明確ではない。そこで〈ケアリング〉の先駆的研究者ミルトン・メイヤロフの著書“*On Caring*”を読み解き、メイヤロフのケアリング論の構造と特性を考察し全体像を把握することで、〈ケアリング〉の本質を浮き彫りにすることを試みた。その結果、メイヤロフのケアリング論は〈ケアリング〉の方法論と本質論の二つの柱で構成されていることと、諸分野に通底する原理的な理論であり人間をケアする存在として捉えたメイヤロフの人間観が根本原理であることがわかった。さらに、〈ケアリング〉は職業の違いを越える普遍であり看護は一つの特殊であることから、看護とケアリングの位置関係は〈ケアリングの一つとしての看護〉である。〈ケアリング〉は看護を通してその姿を現すので、看護の本質的属性が〈ケアリング〉であるといえる。

キーワード：ミルトン・メイヤロフ、ケアリング、本質、人間観、看護

はじめに

〈ケアリング（caring)〉は、世話、介護、注意、気遣い、関心、配慮、心配などと訳される〈ケア（care)〉の派生語であり、看護、福祉、教育などの対人援助職分野において重要視されている概念である。看護分野においては中核的概念として位置づけられており、看護の本質であるといってもよい。しかしその一方で、〈ケアリング〉の概念規定はいまだ十分に吟味・検討されておらず、本質的特性は明確ではないという指摘もある[1]。看護分野で〈ケアリング〉がどのように認識されているのかを確認するための文献検討においても、概念の定義がない状態で〈ケアリング〉について言及している研究論文の多さが目についた[2]。つまり、「〈ケアリング〉は重要だが、いったい何であるかがわかりにくい。」というのが看護界における現状である。もっとはっきり言うと、〈ケアリング〉の概念規定がない状況で、看護実践や看護教育が行われている現状こそが、看護における〈ケアリング〉の根本的な問題であると考える。

〈ケアリング〉を看護の本質としてとらえた代表的な看護理論家には、マデリン・レイニン

ガー（Madeleine Leininger 1925－2012）、ジーン・ワトソン（Jean Watson 1940－）、パトリシア・ベナー（Patricia Benner 1942－）らがいる。レイニンガーは文化人類学的視点から、ワトソンとベナーは現象学的視点からケアリング論を展開した[3]。これらの看護理論家に多大な影響を与えたのが、ミルトン・メイヤロフ（Milton Mayeroff 1925－1979）である[4]。ケアリング研究の先駆者であるメイヤロフは、その著書“*On Caring*”（1971）の中で〈ケアリング（caring）〉という語を初めて用いた哲学者である。

看護の中核的概念であるはずの〈ケアリング〉の本質的特性が明確になっていない状況では、看護の質向上が見込めるはずもない。そのためにまずは、〈ケアリング〉概念の再定位を図ることが必要ではないかと考えた。

本稿は、メイヤロフの著書“*On Caring*”を読み解き、メイヤロフのケアリング論の構造および特性を考察することによって、〈ケアリング〉を原理的に把握する一つの試みである。

Ⅰ　ミルトン・メイヤロフとケアリング論

ミルトン・メイヤロフは哲学者であり、医療関係者ではない。著書の中では、「患者〔patient〕[5]」という語が「精神療法家〔psychotherapist〕」に対応する語として数か所で用いられている[6]が、メイヤロフは看護や医療の視点から〈ケアリング〉を論じてはいない。この前提を念頭におくことがメイヤロフのケアリング論を正しく掴まえるために重要となる。

1．“*On Caring*”『ケアの本質 ― 生きることの意味』の解題

本書は、哲学者であり編集者でもあるルース・ナンダ・アンシェン（Ruth Nanda Anshen 1900－2003）が、種々の分野における最も傑出した思想家・世界的指導者によって書かれた創造的な書物を出版するために企画・編集した“*World Perspectives Series*”（世界展望双書）の１冊であり、1971年にHarpar & Row社から出版された。原題は“*On Caring*”である。邦訳書は『ケアの本質 ― 生きることの意味 ―』というタイトルで1987年に田村真と向野宜之によって出版された。田村氏は医学の立場から、向野氏は教育学の立場からケアについて悩んでいたときに“*On Caring*”と出会い感銘を受け、それから約10年後に邦訳本が出版され現在に至る。

本書は全Ⅵ部で構成されている。以下に原語も併せて記す。

Ⅰ　他者の成長をたすけることとしてのケア：*Caring as Helping the Other Grow*
Ⅱ　ケアの主要な要素：*Major Ingredients of Caring*
Ⅲ　ケアの主要な特質：*Some Illuminating Aspects of Caring*
Ⅳ　人をケアすることの特殊な側面：*Special Features in Caring for People*
Ⅴ　ケアはいかに価値を決定し、人生に意味を与えるか：*How Caring May Order and Give Meaning to Life*

Ⅵ　ケアによって規定される生の重要な特徴：*Major Characteristics of a Life Ordered Through Caring*

２．先行研究の概観と傾向

メイヤロフの〈ケアリング〉に焦点を当てた先行研究は1990年から現在までに11編ある。ここでは、それらの先行研究がメイヤロフの〈ケアリング〉をどのように把握しているのかを整理する。

先行研究が立脚している分野は、看護・医療、教育、哲学の３つである。哲学分野からの研究は少なく、看護、医療、教育、保育などの分野からメイヤロフを研究しているものが多いことからも、対人援助職分野における〈ケアリング〉への関心の高さをうかがうことができる。

メイヤロフのケアリング論が掴まえにくい理由のひとつに、彼がケアの対象を人だけに限定していないという点がある。メイヤロフは序論でこう述べている。

> 両親が子供を、教師が学生を、精神療法家がクライエントを、夫が妻をケアすること―これらの間にいかに大きな相違があろうと、それらはすべて共通のパターンを示していることを私は明らかにしたい。しかし人々をケアすることのほかに、ある意味では、私たちは他のたくさんのものやことを同様にケアすることがある。私たちはたとえば、“新構想”（哲学的または芸術上の概念）や、ある理想や、ある共同社会をケアすることがある。ここでも、一人の人格をケアすることと一つの概念をケアすることの間に、どのような重要な相違があろうとも、その相手が成長するのを援助するという共通のパターンがあることを示したいと思う。これから私が記し探究していくのは、ケアすることの、この一般的なパターンなのである。[7]

メイヤロフがケアの対象を人だけではなく、ものやこと、観念や創作物などにもひろげて捉えていたことは間違いない。しかし、先行研究のほとんどはこの点をおさえていない。中野啓明の「メイヤロフとノディングスの分岐点[8]」、長谷川美貴子の「ケア概念の検討[9]」、石川洋子の「医療における双方向と support というあり方について ― メイヤロフのケアの概念から[10]」には、人だけでないという記述はみられるもののそれがケアすることにどういった意味合いをもっているかについての考察はない。高橋隆雄のみが「メイヤロフ ― ケア論への道[11]」の中で、「ケアという行為や活動がたんにある具体的な種類の行為・活動でないことを語っている。[12]」と考察している。つまり、多くのメイヤロフ研究は、ケアを〈人間にかかわる事柄〉だと思い込み、自己が立脚する分野におけるケアとして読みとっている。しかしメイヤロフは、対象が人であれものやことであれ、〈ケアするということ〉に共通のパターンがあることを強調している。とすれば、この共通のパターンを正しく理解しおさえておくことが、メイヤロフのケアリング論を掴まえるための前提となる。

次に、多くの先行研究はメイヤロフのケアリング論の一部分のみを取り出して検討している。

藤原治美は「メイヤロフによるケアのパターン、要素、特質を検討し、看護の視点から、人をケアすることについて考え[13]」、佐藤正子は「過程の第一義性[14]」、古屋佳子は「了解性[15]」のみを取り出して看護ケアについて考察している。メイヤロフの著書全体を検討しているかのようにみえる後藤恭子の「教育におけるケアリング再考 ― メイヤロフのケアリング論を中心に[16]」においても、ケアの主要な要素、ケアの主要な特質についての検討をしているだけで、ケアリングの全体像を掴まえてはいない。メイヤロフのケアリング論をまるごと掴まえるためには、論の構造を明らかにすることによって全体像を把握しなければならない。後藤はメイヤロフの著書を「主に米国の看護学界でのケアリングを最初に理論的に取り扱い、その後のケアリング論を発展させたものとして認められ、教育界にも大きな影響を与えている[17]」と述べているが、メイヤロフは看護におけるケアリングについて述べてはいない。メイヤロフがケアリングを理論的に取り扱ったのは事実であるが、この時点では看護とケアリング概念の接点はなかった。この重要な部分を後藤は取り違えている。このような誤解は、ケアリングが看護や医療のものであるという偏った先入観があるからだと考える。あらかじめ自分の中に前提となる枠組みを持っている。このような切り口からメイヤロフを検討しても、決して全体像は掴めない。概念を吟味する際の出発点がずれているといわざるを得ない。このような安易な前提をもたずにメイヤロフのケアリング論を分析しているのは、高橋隆雄の研究である。高橋は「メイヤロフがケアの概念を着想した経緯への関心」から「概念の由来、素性、背景を知ること」によってケア概念を理解しようとしている[18]。

メイヤロフの著書の中には〈場の中にいる〔being in−place〕〉という語が頻繁に使われている。この言葉の意味するところは後の章で考察していくが、メイヤロフのケアリング論の本質論につながるキー概念である。先行研究の半数がこの用語を引用しているものの、〈場の中にいる〉ことがケアリング概念全体の中でどの位置づけにあり何を意味しているのかについて考察している研究はほとんどない。藤原は〈場の中にいる〉ことに「彼（メイヤロフ）のケア論の核心がある[19]」と述べてはいるが、なぜケア論の核心として位置づけられているのかという説明には至っていない。

これらの先行研究の傾向をまとめると以下のことがいえる。「ケアの対象は人である」という前提でメイヤロフのケアリング論を捉え、その主張の中の一部を取り出して検討しているものが多い。また、それぞれが立脚する分野からメイヤロフの理論をどのように理解し使えるかということの検討でおわっている。

３．問題の所在・本稿の掴まえ方

前項の先行研究の概観から３つの問題が浮かび上がった。一つ目の問題はメイヤロフのケアリング論を掴むときの出発点のズレにある。概念を正しく捉えるには、自己が立脚する分野や立場を一旦括弧に入れ、メイヤロフの主張をそのまま理解することが必要となるが、このような捉え方が欠如している。二つ目の問題は、メイヤロフのケアリング論を部分的に取り出して

検討しているためにケアリングの全体像を掴みそこなっていることである。三つ目の問題は、メイヤロフのケアリング論を直ちに実践しようとしていることである。〈ケアするということ〉は人間の行為・行動であるのでこの視点も必要ではあるが、この側面からだけでは正しく概念理解はできない。そこには本質的なものがなければならない。メイヤロフのケアリング論の本質を掴む視点が欠如しているということである。

本稿ではそのような掴み方をしない。先入観を持たずにメイヤロフの記述を読み解き、メイヤロフのケアリング論をまるごと理解していくことによって、その全体像を把握し、ケアリングの本質を浮き彫りにする。

メイヤロフは“*On Caring*”を出版する６年前に、同名の論文を学術雑誌“*The International Philosophical Quarterly*”（1965）に発表している。その論文は『ケアの本質』にも訳出されて付録としておさめられている[20]。高橋隆雄が「メイヤロフは概念や文章の彫琢に時間を費やすタイプだったらしく、数年前にも出版可能だったものを練りに練って出したのがその冊子だった[21]」と述べているように、1971年の著書は1965年の論文を原型としながらも内容を大幅に追加しており[22]、メイヤロフのケアリング概念は、1971年の著書にこそ現れていると考える。また、基本的には邦訳本を用いて検討・考察していくが、重要箇所では原語を確認しながらすすめる。

Ⅱ　メイヤロフのケアリング論の構造

原書のタイトルは“*On Caring*”である。Care ではなくて Caring である。前置詞のあとに置かれたこの語は動名詞であるが、現在分詞も同形である。現在分詞には、実際の行為の状態をより強く示すニュアンスがある。現在分詞は繰り返し行われる行為をあらわし、「今まさにしている」という意味合いをもつ。「過去も現在もこれからもずっとケアし続ける」という連続性・継続性が言葉の中に含まれている。つまり、メイヤロフは〈care（ケア）〉をその動きのありようとしてあらためて提示したといえよう。直訳すれば「（今まさに）ケアしているということについて」となる。〈ケアリング〉と〈ケアするということ〉は同義語と考えてよい。ところで、邦訳本の書名は『ケアの本質 ― 生きることの意味』とある。これはあまりにも意訳ではあるが、ある意味では内容そのものを表している。結論を先に述べると、メイヤロフは本書で「ケアしているということは生きることそのものである。」ということを主張している。そしてこれこそがケアの本質である。本書は、ケアするということの一般的な内容と、ケアすることの価値という本質論を述べている。先行研究には、ケアリングの本質論的指摘はなく、何をどのようにすることがケアなのかという部分における指摘のみで終わっていた。そこで、今あらためて、メイヤロフのケアリング論の構造を明らかにし、全体像を捉えることでケアリングの本質に迫る。

1．〈ケアするということ〉の概念

メイヤロフは、「ケアの相手が成長するのをたすけることとしてのケアの中で、私はケアする対象（一人の人格であったり、理想であったり、思いつきであったりする）を、私自身の延長のように身に感じとる。」（p. 18）と述べている。ここで着目したい重要な点は二つある。ケアの対象を人だけに限定していない点と〈ケアする〉ことは〈相手の成長を援助する〉ことであるという点である。われわれが「ケアする」という言葉を用いるとき、相手は人であるという潜在的固定観念を持ち、ケアについて考えたり行動したりする。しかし、メイヤロフはこの前提に立たず、ケアリングをもっと広い視点から捉えている。

では、〈相手の成長を援助する〉とはどういうことか。メイヤロフは、ケアの相手が人である場合と人以外である場合を区別して、成長することがどのようになっていくことなのかを具体的に記している。

ケアする相手が人の場合、その人が成長するとは「その人が新しいことを学びうる力をもつところまで学ぶことを意味」し、この学びは「知識や技術を単に増やすことではなく、根本的に新しい経験や考えを全人格的に受けとめていくことをとおして、その人格が再創造されること」（p. 29）であるという。ケアする相手の成長とは、相手の「人格が再創造される」こと、つまり、今ある人格から新しい人格へと変化していくことを示している。

一方で、ケアの相手が人ではない場合については、相手が概念である場合を例にして次のように説明している。

> 私は“ケアする”というような一つの哲学的概念が、自分の中で成長していくのを援助する…（中略）…一般的な事項の中でその概念が成長するにつれて、それと同時に、特定の事項の中でもその概念が成長してくる。…（中略）…そして、明らかに例外と思われるものとよく考え合わせることによってもこの概念は成長していく。（pp. 30－31）

概念の成長は、まず「一般的な事項の中」で起こり、その成長に伴って「特定の事項の中」においても成長するとメイヤロフはいう。これは、観念的なものであった概念が実際の内容を備えた明確な形をもつ概念へと変化することを示しており、メイヤロフは概念がこのように変化することを概念の成長する姿であると捉えていることがわかる。そして、このように具現化した概念は、他の概念との関係をさらに吟味することによって、「互いを強めあうように」なり、「互いに意味を深め合うと同時に、より正確さを持つようになる」（p. 31）。つまり、概念がよりはっきりと意味のある形となってわれわれの世界に姿を現す様子を示している。

ケアの相手が人である場合と人以外である場合の共通項は、相手の様相が発展的変化を遂げることにあるといえる。メイヤロフは、このように発展的変化を遂げることを〈成長する〉こととして捉えている。この発展的変化の契機となるのが〈ケアするということ〉なのである。そして、このような変化は、ケアすることが「連続性を前提」とし、「発展的過程を指しているからである。」（p. 78）。

さらにメイヤロフは、ケアするということは、相手だけではなく自分自身に対するケアも含

み、「自分自身に対するケアということは、“ケアすること”という属（genus）の中の種（species）の一つなのである。」（p. 103）という。そして、「自身をケアするためには、自分自身を他者として感じとることができなくてはならない。」（p. 104）と述べる。

> 自己へのケアは、自己以外の何物か、あるいは誰かをケアする必要性があることも意味しているのである。…（中略）…成長とはいかなることであるか、その意味を理解し評価できる人、成長のためにはいかなることが必要であるか、それを理解し、その必要性を充足させようと試みる人にしてはじめて、他者の成長の意味というものが適切に理解でき評価できるのである。（p. 106）

成長するために何が必要で、それらをどのように充足していけばよいかについての具体的な記述が、「ケアの主な要素」と「ケアの主要な特質」に書かれている。メイヤロフは、「ケアの主な要素」として、知識、リズムを変えること、忍耐、正直、信頼、謙遜、希望、勇気の８つをあげる。

「誰かをケアするためには、私は多くのことを知る必要がある」（p. 34）し、「あるがままの相手を見つめなければならない」（p. 46）。また「私が期待しているものが達成されたかどうかを確認」し「もしそれが成功していなかったならば、他の方法で再び試みる」（pp. 39－40）ことも必要である。さらに、「その相手が、自ら適したときに、適した方法で成長していくのを信頼する」（p. 50）のと同時に「ケアにたずさわる自分自身の能力も信頼しなければならない。」（p. 53）それは、「私のケアをとおして相手が成長していくという希望」（p. 60）と「相手が一体どのようなものになるのか、また私自身がどのようなものになるのか、十分予測できない」ような「未知の世界に踏み込む場合にも存在する」（pp. 64－65）勇気に支えられている。「ケアする人は実に謙虚であり、相手や自分自身について、またケアというとどこまでが含まれるかについて、すすんでより多くのことを学ぼうとする。」（pp. 55－56）そして「全面的に身をゆだねる相手への関与の一つのあり方」（p. 44）としての忍耐も持ち合わせている。

「ケアにおいては、他者が第一義的に大事なものである。すなわち、他者の成長こそケアする者の関心の中心なのである。」（p. 68）「そこで常に問題になるのは、この人格、このアイデアに、いま、ここでいかに応ずるかということである。」（p. 71）

これらの８つの要素はすべて、〈相手の成長を援助する〉ことに通底している普遍であり、〈ケアすること〉の方法論でもある。

続いてメイヤロフは、「ケアの主要な特質」として、ケアを通しての自己実現、過程の第一義的重要性、ケアする能力とケアを受容する能力、ケアの対象が変わらないこと、ケアにおける自責感、ケアの相互性、ケアであるといえる範囲の７つをあげている。これは、今、目の前にいる相手のみに関心を寄せ、相手の成長をひたすら願い、自己の持てるすべてを相手に集中させて相手に寄り添うというケアのありようについての説明である。それは、「ときに特別な資質あるいは特殊な訓練を必要とする」（p. 75）場合もあるし、単に相手の成長を願うだけで

は不十分で、「その成長を手助けできるだけの力がなければならない。」（pp. 75－76）ことを指摘している。自分の持てる力を目の前にいる相手にのみ発揮させるということの中には、相手を成長させるだけの力を得る努力をしなければならないことも含まれている。そのような関係を築き相手に関与していれば、そうでない状況に陥ったときには、「相手を裏切ってしまったという気持から」自ずと「ケアにおける自責感」（p. 80）が生じ、「その自責感により、相手に対して責任を持つ者に立ち返ることができるのである。」（p. 81）

このケアの特質は、ケアしているときの自己のありようであり、ケアの相手にどのような関心の寄せ方でどのようにかかわっていくべきかについての記述である。

さらに、〈ケアしている〉とは、〈相手の成長をたすける〉ことであるので、どのような方法でケアしたとしても、相手が成長していなければ、それはケアしたことにはならないとメイヤロフはいう。

> 自分がケアしているのかどうかを見きわめるためには、自分のすること、感じること、意図することを観察するばかりではなく、私の行動の結果として相手が成長しているかどうかをも、見なくてはならないのである。…（中略）…全体としてとらえた私の行動が、相手の成長を援助しているという状態でなければならないのである。そのうえで基本的に成長が認められなければ、いかなることをしていたとしても、私はケアしていることにはならない。（pp. 89－90）

２．〈ケアリング〉と人生における意味

本書の前半部分と後半部分では、その内容の趣きが変わる。

> これまでは、ケアの形態を、私たちの人生というさらに大きな文脈における場を考慮に入れずに考察してきた。そこでこれから、ある人の人生においてケアが果たす役割と、包括的ケアを通じて全人格的に統合される人生の本質とについて考察してみたい。（p. 110）

前半部分の記述内容は、前述したように、〈ケアするということ〉の一般的かつ具体的な考察であった。後半部分は、ケアする人にとって〈ケアするということ〉がどのような意味を持つのかについての考察である。この記述の大半は、1965年の論文にはなく、1971年の著書に追加された部分でもある。とすれば、メイヤロフが時間をかけて熟慮し捻出したものがこの部分に表れていると考えてよい。考察のキーワードとなるのが〈場の中にいる〔being in-place〕〉である。〈場の中にいる〉ことはケアリングの本質に深くかかわる概念ではあるが、ケアリングの本質そのものではない。先行研究の多くが〈場の中にいる〉ことを重要概念と捉えていながらも、メイヤロフのケアリング論を正しく掴めていなかったのは、〈ケアリング〉概念と〈場の中にいる〉ことの位置関係を明確にしていないことにある。

メイヤロフは、「“場の中にいる”ということは、私と補充関係にある対象〔my appropriate others〕への私のケアによって中心化され、全人格的に統合された生を生きること」（p. 126）であり、「私は私の生の意味を十全に生きるのである。」（p. 132）「自己の生の意味を生きるこ

とは、私と補充関係にある対象をケアすることにより“場の中にいる”ということである。」（p. 133）という。つまり、〈場の中にいる〉ということは、その人の生き方と結びついていることを示している。では、生きることにつながる〈場の中にいる〉とはいったいどういうことなのか。このような〈場〉はどのようにつくられ、どんな状況を生み出すのだろうか。このことについてメイヤロフは様々な視点からかなり詳細に考察し記述している。「〈場の中にいる〉ということの中には、ある安定性がある。」（p. 140）といい、この安定性を「基本的確実性〔basic　certainty〕」と命名している。「この状態とは、いわば私たちが床の上に寝ているようなものなのであって、もはやベッドからころげ落ちる心配がないといった心境」（p. 141）であり、「世界に根を下ろした状態といった状態」（p. 142）である。このような〈場〉は、最初からどこかにあるのでなく、「自らを“発見する”人が、自らを“創造する”ことについても大いに力をつくしたと同様なやり方で、私たちは自分たちの場を発見し、つくりだしていくのである。」（pp. 115－116）　ケアすることは相手が発展的変化を遂げることをたすけることであった。つまり、相手のためにケアすることに専心することで自分の落ち着き場所がうまれる。また、「この場は絶えず新しくなっていき、そのつど再認識されるのである。場というものは、たった一度だけ確立されればそれでよいというものではない。…（中略）…さらに、場というものは実体化されるべきものでもない〔place should not be hypostatized〕。これは物ではないし、固定した状態でもないのである。」（p. 117）と述べ、〈場の中にいる〉という感じについては次のように表現している。

> “場の中にいる”と感じるときには、そこには経験についてのある濃度というべきものが存在している。この濃度は、ケアの尽きることのない性格の中にその姿を示している。…（中略）…またこの豊富さというのは、私たちと補充関係にある他者へのケアをとおして、この他者が成長していくことにも示される。存在がその深みを増してくるのである。つまりこれは、私たちが興味をもっているものについて深く研究すればするほど、その対象が貧弱になるどころか、より豊饒であることがわかるのと同様である。（p. 153）

ケアすることをとおして相手も自分も絶えず変化し続けていくが、同時に〈場〉も変化し続けそのプロセスの中で何度でも確立される。なぜならば、〈場〉の中には経験についての濃度が存在するからである。この濃度とは経験の様相を表している。われわれの経験は使ったらなくなるというようなものではなく、それとは対蹠的にケアする相手にケアすればするほど、相手の成長を願えば願うほど、豊富さや豊饒さといった充実性が満ちていき濃度がますます濃くなるようなものである。人が生の意味を感じる場とはこのような〈場〉なのである。では〈場の中にいる〉ことが、なぜ自己の生の意味を生きることになるのだろうか。〈場の中にいる〉という安定性、つまり〈基本的確実性〉が、生を生きるということの要になっている。

> 私と補充関係にある対象によって必要とされている、という事実からくる帰属感〔belonging〕を深く身に感じとると、その経験は私を根底から支えるのである。これこそ基本的確実性の一要素なのである。（pp. 143－144）

基本的確実性は、自分が誰かから必要とされているという帰属感を拠り所とし、それゆえに世界に根を下ろした状態をつくっている。これは、「私はここにいていい」という承認を相手から得たことを意味する。つまり、自己の存在に対する承認である。この承認が自己の存在を根底から支えるのである。人は誰かあるいは何かから必要とされることを通した承認によって自己の落ち着き場所を獲得するのである。「帰属し、必要とされている」という状態は、「自己を開いてくれるもの」（p. 157）であり「経験し、理解し、感得することで、存在の持つ神秘そのもの」（p. 158）として示されるものであるがゆえに、自己の存在の意味を実感していくことであるといえる。

> 内面と外面との統合が、基本的確実性のもう一つの要素である。私が“場の中にいる”ときには、自認する価値と実際の生き方、自分の考え方と実際の生き方、私が自分の行動を内面からどう見ているかと、他者が外側からそれをどう見ているか―これらの間には理解できる収斂点が存在する。私の実際の生き方が、私が何を価値としているかを裏づけている。…（中略）…私のケアと相容れない多くの不適切なものが排除されると、私は自分自身が何者なのか、何をしようとしているのかについて、根本的な明澄性を獲得するのである。（pp. 144－145）

メイヤロフのいう内面と外面とは、自分がどのような価値観で何を考え実際にどのように生きるのかという生き様と、それが他者にはどのように見られどう受け止められるのかという他者側の視点や考えを示している。この両側面にズレがなく一致している状態を「内面と外面との統合」と表現している。〈場の中にいる〉とは、根底から自己が支えられている自己の落ち着き場所に存在することであった。このように自己の存在を承認されているという絶対的な安定感のある場では、人は他者から自己がどうみられるかということに気を遣う必要はなく、本来の自己をさらけ出せる。なぜなら、その場は、自己が他から必要とされることによって生み出された場だからである。自己の内面と外面が矛盾なく統合されている状態であるので自然に自分らしくいられる。

> 私が自己の生の意味を生きているとき、自分の生の中へしだいに了解性（intelligibility）が浸透してくる。…（中略）…了解性とは、私の生活に関連しているものは何か、私が何のために生きているのか、いったい私は何者なのか、何をしようとしているのか、これらを抽象的なかたちではなく、毎日の実生活の中で理解していくことなのである。…（中略）…私の言いたい了解性は、私たちが何かあるものに帰属しており、かつ、何物かから、あるいは誰かから自分たちが特別に必要とされているという感じをともなっているものである。（pp. 154－155）

〈ケアすること〉をとおして人は、「私の生活に関連しているものは何か」「私が何のために生きているのか」「いったい私は何者なのか」「何をしようとしているのか」ということに気づ

くようになり、生きる意味がはっきりと現れる。メイヤロフは、「感謝（gratitude）は、“場の中にいる”ということから生ずる自然な発露である。」（p. 176）「私が生きている意味に気づかせてくれたこと、今ここであなたに出会えたことへの感謝がケアすることなのである。」と述べている。人やものや出会いなどが再現性のきかない１回きりのものであり、かけがえのないものであるからこそ、人は〈場の中にいる〉ことに対して感謝し、感謝の形が〈ケアすること〉なのである。

〈ケアすること（ケアリング）〉が人生において果たす役割とは、自己の存在の意味を知ることにあるといえる。〈場の中にいる〉ことは、生きている意味に気づく場を意味しているので、生きることと深く結びついている。

３．メイヤロフのケアリング論の構造と要諦

本書の構成いわゆる目次には、「要素」「特質」「側面」「特徴」などの言葉が並んでおり、ややすればそれらの言葉を手掛かりとしてメイヤロフのケアリング論を読み取りそうになる。しかしそれらの言葉に安易に囚われずに内容全体を読み込んでいくことで、メイヤロフのケアリング論には二つの柱があることが見いだせた。一つ目の柱は、ケアするということがどういうことなのかを様々な角度から具体的に考察した〈ケアすること〉という概念である。〈ケアリング〉の一般的なパターンについての記述でもある。もう一つの柱は、〈場の中にいる〉ことの理解を深め、自己の生の意味を生きることが〈ケアリング〉であることの考察である。〈ケアリング〉とは、自己の存在の意味を知ることであり、メイヤロフは根本原理として捉えているといってよい。〈ケアリング〉の価値論ともいえる。

ところで、原著のタイトルは“*On Caring*”のみで副題はないが、邦訳本のタイトル「ケアの本質」には「生きることの意味」という副題がある。確かにメイヤロフはケアリングの本質に迫り、それが生きることの意味であることを主張しているので、邦訳タイトルは内容から大きくかけ離れているわけではない。しかし、通常われわれは、まず書名をみてそれを念頭におきながら内容を理解しようとするので、メイヤロフのケアリングの本質部分を正しく掴む読み方をしなければ、多くの先行研究がそうであるように、一つ目の柱である〈ケアするということ〉の一般的パターンがあたかもケアの本質であるような誤った捉え方をしてしまう。

Ⅲ　メイヤロフのケアリング論の特質と意義

１．メイヤロフの人間観と〈ケアリング〉

これまで見てきたように、メイヤロフは看護や教育といった個別の分野における〈ケアリング〉について語ってはいない。ケアする相手が人や物あるいは観念や概念であっても、相手が〈成長する〉という意味において同じであり、それらすべてに通底するものがあるとしている。つまり、諸領域に通底する本質的なものについて述べている。このように考えると、メイヤロ

フのケアリング論は対人援助職分野だけのものではない。彫刻家や音楽家など芸術分野や、職業から離れた立場の子育てをする親、介護する子など広い範囲をも包括する原理的な理論であると考えることができる。それは、メイヤロフが〈ケアリング〉をとおして「人間とは何か」「いかなる存在か」「いかに生きるべきか」ということを探求し、人間の存在価値を基底から考え捉えようとしているからだと考えることができる。そしてメイヤロフは、人間をケアする存在として捉えた。「ケアすることは生きることである」「人間はケアすることで生きている」というのがメイヤロフの人間観である。つまり、ケアすることに人間の本質的基底があるという考えに立脚している。このように考えると、メイヤロフのケアリング論は、ケア論であると同時に人間の本質を探究する人間学でもある。

“*On Caring*”が多くの理論家に影響を与えた良書とされながらも哲学固有の難解さからその本旨が伝わりにくいのは、彼が急逝したことでその後の論述が公表されていないことも理由として考えられる。メイヤロフの著書はこの１冊しかない。しかし、われわれはここからメイヤロフの意図を読み取って〈ケアリング〉に向かわなければならない。

２.〈ケアリング〉から看護を捉えなおす

冒頭で述べたように〈ケアリング〉は看護の中核的概念であるといわれている。そこで、メイヤロフのいう〈ケアリング〉から看護における〈ケアリング〉について捉えなおす。まず、ケアリングと看護の位置関係である。メイヤロフの〈ケアリング〉は、諸領域に通底する本質であった。〈ケアリング〉の中には、看護だけでなく、教育、保育、介護など種種の分野が含まれる。ケアリングと看護の位置関係を〈普遍－特殊〉という概念枠組を用いて説明することができる[23]。メイヤロフのケアリング論は、種々の職業分野の違いを越えていく普遍的な理念であり、看護は〈ケアリング〉の中に包括されている一つの特殊であるといえる。看護は〈ケアリング〉の中の一つの職業分野に過ぎず、「看護＝ケアリング」ではなく〈ケアリングの一つとしての看護〉であるという図式が成立する。これは、特殊なものの中に具体的普遍が内在していることも示す[24]。看護という特殊においても〈ケアリング〉という普遍が立ち現れる。つまり、〈ケアリング〉は、看護の中にあってその本質を形成し、看護をとおして自己の姿を現すのである。以上のことから、看護の本質的属性が〈ケアリング〉であると考えることができる。

看護というケア行為は、特定の教育や訓練を受けて必要な知識や技術を携えてさえいれば、誰にでも実施可能な行為であるという考え方もある。しかし、これはメイヤロフのいう一般的なケアの側面のみをとりあげていることになり、ケアの本質的な側面には焦点があたっていない。メイヤロフのケアリング論は看護ケアを直接的に念頭においたものではないので安易に演繹すべきではないが、〈ケアリング〉の本質的側面に光が当たっていない状態で〈ケアリングの一つとしての看護〉を語ることは本来の姿を見失うことになる。今まで見過ごされてきたこの側面から今あらためて看護を見定め、その姿を捉えなおすことで、〈ケアリングの一つとし

ての看護〉が浮き彫りになる。〈ケアするということ〉の本質的特性は、相手の成長をたすけることをとおして「自己の生の意味に気づき生きること」であった。とすれば、「看護というケアをすること」は「看護師としての生の意味に気づき生きること」に他ならない。それは、私の生活に関連しているものは何か、私は何のために生きているのか、いったい私は何者か、何をしようとしているのかということを、看護をとおして気づき生きていくことである。看護師として相手をケアすることで自己の生の意味に気づくのである。言い換えれば、看護師として相手をケアしていく中に自分が現れるのである。ケアしているときに私になっているともいえる。このように考えると、〈ケアリング〉は学習したり訓練したりすることでその能力が追加されて増えるものではなく、看護という〈ケアリング〉を実践する中で、自己の内側から湧き上がってくるものである。だからこそ、それは看護師としての自己の存在を根底から支えるのである。

次に、〈ケアリングの一つとしての看護〉の教育について考察する。看護職は国家資格を有するためにその教育に関する事項は法律において細かく規定されている[25]。ケアするにはどうすればいいかという方法論、つまりメイヤロフのいう〈一般的なケアリング〉の部分はカリキュラムに沿って教育されている。しかし、〈ケアリング〉の本質的特性でもある「自己の存在の意味を知り生きる」部分は、本質論であるがゆえにカリキュラム化されていない。これは教育されていないことを示すのではなく、個々の教員あるいは個々の養成所の判断の下で教育されていることを示している。法規定があることで本質的で重要な部分が抜け落ちるという制度の盲点でもある。ケアリングの看護教育例としては、〈ケアリング〉を看護倫理のひとつとして捉えて倫理教育として教授する。あるいは、対象への接近技術として看護技術論の中で教授するなどがある。しかし、〈ケアリング〉の本質的特性は、「生の意味に気づき生きること」であり、看護の場合、それは看護職として生きる自分は何者なのかに気づくことであった。とすれば、倫理的側面や技術的側面からの教育だけでは不十分である。では、どのような教育が必要になるだろうか。そのヒントもメイヤロフの記述の中にある。

> “場の中にいる”ことへの感謝の念をもつことによって、私には人や物が、より大切でかけがえのないものと思えるようになるし、こうした対象と、それらからの私に対する要求とに対して、自分がより動的に応答するようになる。さらに、その感謝の念は私を活気づけ、自分と補充関係にある対象へのケアへ向かわせる。…(中略)…これはちょうど、“場の中にいる”ことによって私自身がケアされるのと同様であり、それゆえ私としては、それに対して報いたい（ケアしたい）のである。しかし、私は人生全般に感謝する（ケアする）ことはできない。私は人生のうちの、この場合、または、あの場合という具体的な対象をケアすることによってのみ、人生に感謝できるのである。(pp. 179－180)

メイヤロフは、ケアする相手をケアが必要な人とは見ずに、“場の中にいる”ことに気づかせてくれた存在として見る。そして気づきを与えてくれたことへの感謝として〈ケアしたい〉と思うのである。「自己の生の意味を生きるということの根底的な性質は、くしくも、生の尽

きせぬ深みを限りなく知ることに通じている。」（P. 181）と述べているように、“場の中にいる”ことは、われわれが生きるときに本質的な意味をもちながらわれわれの生に横たわっている。〈場の中にいる〉いることの安定性と重要性、成長をたすける相手と自分はケアしケアされる間柄であり対等であること、そのことに感謝することがケアになることなどに気づくことのできる教育が必要である。それが、ケアする意味、生きる意味を自己のこととして捉えることができることにつながるからである。

看護職の資格は国家試験を受験し一定の成績を修めれば取得できる。しかし、専門職とは資格があるというだけでよしとはしない。専門職として必要な知識や技術は、看護師養成カリキュラムの中で学び得られるものも多い。その一方で、職業人としてどう生きていくかを単なる自己のキャリア形成にとどまらず、看護師として患者をケアすることの意味、看護師として生きる意味に気づく場をもつことは、看護師としてのゆるぎない基軸をもつことにつながる。この基軸こそがメイヤロフのいう〈基本的確実性〉であり、自分が誰かから必要とされているという帰属感を生み出し、生きている意味に気づくことのできる〈場の中にいる〉ことを可能にする。だからこそ、ケアすることをとおして生きる意味を自己のこととして捉えることができる教育が重要である。

おわりに

メイヤロフのケアリング論の構造と全体像を明らかにすることで、メイヤロフの〈ケアリング〉の本質について考察した。メイヤロフのケアリング論には、ケアすることがどういうことなのかを具体的に考察した〈ケアすること〉の一般的なパターンについての記述と、自己の生の意味を生きることが〈ケアリング〉であることの記述の二つの柱から構成されている。メイヤロフのケアリング論は、個別の職業としてのケアという狭い概念ではなく、諸分野に通底するきわめて原理的なケアリング論であって職業としてのケアリングを超えるものである。そこには、「すべての人間はケアしながら生きて」おり、「ケアするときに私になっている」という人間をケアする存在として捉えるメイヤロフの人間観があらわれている。このケアリング論を看護に照らして検討したとき、看護とケアリングの位置関係は〈ケアリングの一つとしての看護〉であり、看護の本質的属性が〈ケアリング〉であることが明らかにできた。そして、現在の看護教育における問題は、方法論である〈一般的なケアリング〉の側面のみがカリキュラム化されていることであり、本質論的な〈ケアリング〉については見過ごされてきたことにある。それは〈ケアリング〉概念が十分に吟味・検討されておらず本質的特性が明確になっていなかったことに原因の一端がある。〈ケアリング〉は、看護職がどのように生きるかという本質根源的な問いでもある。この問いに応えるために、本質的な〈ケアリング〉の教育を検討し構築していくことが今後の課題である。

〔注〕

1　看護学生を対象とした教科書的位置づけにあるシリーズ本の一冊に「ケアリングに関する統一的な解釈・同意はない」と書かれている。
佐藤芙佐子「ケアリング」大西和子・岡部聰子編『成人看護学概論』ヌーヴェルヒロカワ、［成人看護学シリーズ］、2009年、p. 171.
アメリカ看護師協会の倫理委員会委員長を歴任する２人の倫理学者も「ケアリングの定義は、いまだ十分明確ではなく合意も得られていない」と記している。
Anne J.Davis and Marsha Fowler、和泉成子訳「文献に見られるケアリングとケアの倫理：明らかになっていることと問いかけが必要なこと」小西恵美子監訳『看護倫理を教える・学ぶ　倫理教育の視点と方法』日本看護協会出版会、2008年、pp. 168－169.
上記の２冊の記述から、〈ケアリング〉の概念規定が十分に吟味・検討されていないのは、日本だけではなく、ケアリングが発祥したアメリカにおいても同じであることがわかる。

2　論文検索サイト「CiNii」を用いて文献検索を行ったところ、1998年から2014年７月までに発表された日本語のケアリング研究論文は144編あり、入手可能な文献について論旨把握を行なった。

3　都留伸子監訳『看護理論家とその業績』医学書院、1995年

4　メイヤロフとレイニンガーは同時代のアメリカの研究者である。レイニンガーが〈ケアリング〉という語を初めて使用した看護論文「ケアリング―本質的な人間の欲求」“*Caring : An Essential Human Need*”を発表したのは、メイヤロフの著書が出版されてから10年後の1981年である。このことから、レイニンガーはメイヤロフの影響を受けていると推測できる。
ワトソンにおいては、レイニンガーの業績を深く憧憬し自己の理論開発の土台としていること（都留伸子監訳『看護理論家とその業績』医学書院、1995年、p. 148.）と、その著書『看護―人間科学とヒューマンケア』“*Nursing : Human Science and Human Care*”（1985）の中に、メイヤロフの著著を「良書である」と紹介している記述がある。
ベナーのケアリングに関する現象学的理論を記した著書『ケアリングの卓越性 ― 健康と病気におけるストレスとコーピング』“*The Primacy of Caring : Stress and Coping in Health and Illness*”は1989年に出版されている。
以上から、ケアリングの看護理論はメイヤロフのケアリング論が下敷きになっていると考えてよい。

5　邦訳本の引用において、筆者が記載する必要があると判断した原語は〔　〕で示した。

6　ミルトン・メイヤロフ、田村真・向野宣之訳『ケアの本質 ― 生きることの意味』ゆみる出版、1987年、p. 76、p. 84、p. 85、p. 100.

7　同上書、pp. 14－15.

8　中野啓明「メイヤロフとノディングスの分岐点」『新潟青陵女子短期大学研究報告』29、1999年４月、pp. 71－80.

9　長谷川美貴子「ケア概念の検討」『淑徳短期大学研究紀要』第53号、2014年２月、pp. 127－136.

10　石川洋子「医療における双方向性と support というあり方について ― メイヤロフのケアの概念から」北海道大学大学院研究科応用倫理研究教育センター、『応用倫理』５巻、2011年、pp. 64－74.

11　高橋隆雄「メイヤロフ ― ケア論への道」熊本大学倫理学研究室、『先端倫理研究』７巻、2013年、pp. 111－126.

12　同上書、p. 119.

13　藤原治美「ミルトン・メイヤロフのケア論と看護」『京都大学医療技術短期大学部紀要』別冊、健康人間学２巻、1990年、p. 15.

14　佐藤正子「メイヤロフの概念の妥当性と限界」『ヘルスサイエンス研究』４（１）、ぐんまカウンセリング研究会、2000年10月、pp. 30－33.

15　古屋佳子「対人援助職者の身体知とバーンアウト症候群について：個人固有の〈職業の意味〉とメイヤロフの〈了解性〉に関する検討からの考察」『京都市立看護短期大学紀要』31巻、2006年、pp. 113－123.

16　後藤恭子「教育におけるケアリング再考 ― メイヤロフのケアリング論を中心に ―」日本カトリック教育学会、『カトリック教育研究』26号、2009年、pp. 39－52.

17　同上書、p. 39.

18　高橋隆雄「メイヤロフ ― ケア論への道」熊本大学倫理学研究室、『先端倫理研究』７巻、2013年、p. 111.

19　藤原治美「ミルトン・メイヤロフのケア論と看護」『京都大学医療技術短期大学部紀要』別冊、健康人間学２巻、1990年、p. 18.

20　同上書、pp. 183－215.

21　高橋隆雄「メイヤロフ ― ケア論への道」熊本大学倫理学研究室、『先端倫理研究』７巻、2013年、p. 112.

22　1965年の論文は以下に記す16の見出しで構成されている。
「ケアの現象学　１. 差異の中の同一性　２. 他者の価値の感得　３. 他者の成長をたすけること　４. 関与と受容性　５. 専心　６. 相手の不変性　７. ケアにおける自己実現　８. 忍耐　９. 結果に対する過程の重要性　10. 信頼　11. 謙遜　12. 希望　13. 勇気　14. 責任における自由　広義の意味のケア」

23　〈普遍 ― 特殊 ― 個〉の三項図式に関しては、大西正倫『表現的生命の教育哲学 ― 木村素衛の教育思想』昭和堂、2011年の第４章（pp. 158－178）を参照。本稿はケアリングと看護の位置関係について述べているので、〈個〉には言及していない。

24　〈具体的普遍〉については、同上書『表現的生命の教育哲学 ― 木村素衛の教育思想』の注（同書 p. 100）において次のように説明されている。
「具体的」とは、文字通り「体（たい）を具（そな）えている」ということであって、含蓄的なものが顕現すること、相（すがた）をとること。潜勢態を脱して現実態と成ること。それを構造する契機連関のすべてを挙げてそこに現成（げんじょう）していること。平たく言えば、“フルに現実化し具現している”ということである。

25　看護職養成所の運営に関する事項は、「保健師助産師看護師法（昭和23年法律第203号）」「保健師助産師看護師学校養成所指定規則（昭和26年文部省・厚生省令第１号）」「看護師等養成所の運営に関する指導要領について（平成13年健康政策局発５号）」の３つによって定められており、教育内容と留意点、単位数などが規定されている。詳細は、「看護行政研究会『看護六法』平成26年版、新日本法規出版、2014年」を参照されたい。

〔参考文献〕

・ミルトン・メイヤロフ、田村真・向野宣之訳『ケアの本質―生きることの意味』ゆみる出版、1987年

・Milton Mayeroff, *On Caring*. Harper Collins Publishers, 1971, Harper Perennial edition,1990.

・小林浩之「保育におけるケア概念の検討 ― 養護と教育の一体性に着目して ―」『教育実践総合センター研究紀要』18巻、奈良教育大学教育実践総合センター、2009年３月、pp. 141－149.

・安井絢子「ケアとは何か ― メイヤロフ、ギリガン、ノディングスにとっての「ケア」―」京都大学哲学論叢刊行会、『哲学論叢』37巻（別冊）、2010年、pp. 119－130.

・千葉胤久「メイヤロフの「差異の中の同一性」概念」『北海道教育大学紀要人文科学・社会科学編』64巻２号、2014年２月、pp. 1－12.

・石黒昭博監修『総合英語 Forest』第６版、ピアソン桐原、2009年

（にしだ　えみ　教育学研究科生涯教育専攻博士後期課程満期退学・研究員）
（指導教員：大西正倫教授）
2014年９月30日受理